慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	観光地における〈歴史〉の役割 : 鎌倉を事例として
Sub Title	
Author	高岡, 文章(Takaoka, Fumiaki)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2004
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.58 (2004.) ,p.86- 88
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成15年度[慶應義塾大学]大学院高度化推進研究費助成金報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000058-0086

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

老川　寛　1999「小山隆の実証的家族研究」東洋大学社会学部『東洋大学社会学部 40 周年記念論集』49-92.
田渕六郎　1999「家族の理論研究とその枠組み」野々山久也・渡辺秀樹 (eds.)『家族社会学入門　家族研究の理論と技法（社会学研究シリーズ 1)』文化書房博文社：277-294.
高橋統一　1998「鈴木栄太郎と小山隆　社会学と社会人類学の接点」『家隠居と村隠居　隠居制と年齢階梯制』岩田書院：108-118.

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程

観光地における〈歴史〉の役割
――鎌倉を事例として――

高　岡　文　章*

0. はじめに

鎌倉市はおよそ 17 万人の人口を抱える郊外住宅都市であると同時に，年間約 2,000 万人の来訪者が訪れる日本有数の観光地でもある。鎌倉の観光資源は寺社，旧跡，やぐら，切り通し，自然，植物，海岸，マリンスポーツなど様々であるが，なかでも歴史的な観光スポットの人気は突出している。また観光ガイドブックにおいても鎌倉が「古都」「歴史都市」であることが強調されている。本研究は，鎌倉において〈歴史〉が果たす役割について考察を行った。歴史という語は通常，時間的な連続性を有し，特定の時間軸上にプロットされるものを指す。しかしここではそのような歴史学的な用法とは対照的に，あくまでも観光対象としてまなざされ消費される過去・伝統・昔・古さなどの総称として〈歴史〉という語を用いている。

本研究は (1) 鎌倉という地域が〈歴史的な場所〉と見なされるようになるプロセスをたどり，(2) 現在の鎌倉において〈歴史〉がどのように機能し，把握され，変容しているのかを明らかにする，という二つの作業を通じて，鎌倉における〈歴史〉の役割，および鎌倉の観光実態を多角的に探究することを目指した。

1. 〈歴史化〉のプロセス

鎌倉は京都や奈良と並んで古都と呼ばれ，日本屈指の歴史的な観光地とされている。鎌倉の〈歴史性〉や「古さ」は，まず鎌倉時代や中世を連想させるその地名によって正当化されており，また古都保存法によって法制化されている。しかし現在の鎌倉には鎌倉時代の遺構はほとんど存在しない。現存する最古の建築物は円覚寺舎利殿だがその創建年代は室町前期とされており，それ以外の多くの寺社建築は主に江戸期から明治期にかけて再建/創建されたものである。鎌倉は内部/外部の多様なまなざしによって〈歴史化〉されてきたのである。

そこでまずは明治期以降の鎌倉の歴史を辿ることにより，鎌倉が〈古都〉〈歴史都市〉と見なされるようになるプロセスを明らかにすることを試みた。明治初期の鎌倉はさびれた農漁村であったが，東海道線や横須賀線の開通を主な契機として，結核療養地・保養地・別荘地として繁栄するようになった。特に関東大震災後は郊外化の拡大に伴って郊外住宅地として整備が進んだ。

このように明治期の鎌倉が〈歴史的な場所〉ではなかったという事実はいくつかの先行研究がすでに

明らかにしてきた。他方，そのような場所がどのようなプロセスで〈歴史化〉されてきたのかを探究する試みについて豊富な蓄積があるとは言えない。本研究では1960年代におこった御谷騒動（鎌倉の心臓部とも言うべき鶴岡八幡宮の裏山の宅造計画に対する住民の反対運動）に焦点をあて，〈歴史〉がどのようなプロセスで意味を持つようになったのかを詳細に検討した。資料としては運動の当事者の回顧録や陳情書，地元で発行された雑誌などを用い，当時の人々の意識をそこに読み取ろうとした。

以上の作業を通じて，運動の根拠が当初の「住民の生活」からしだいに「貴重な自然環境」へと，そして後に〈歴史〉へと移行していったことが確認された。つまり，運動を持続し進展させるための手段として〈歴史〉が動員されたのである。運動は，京都や奈良で同時並行的に起こっていた開発反対運動と連動し，全国的な関心を呼び，結果的に古都保存法の制定へと結実した。

2. せめぎ合う〈歴史〉

鎌倉の〈歴史〉について問うとき，それがどのように構築/構成されてきたかを明らかにするだけではなく，それが実際にどのようにまなざされ，変容し，再編成されるのかを具体的に考察する必要があるだろう。本研究では鎌倉の〈歴史〉の現在についても解明を試みた。その際，住民や来訪者に対するアンケート資料や，鎌倉市の行政資料などを資料として用いた。

観光調査からは来訪者の半数以上が鎌倉に〈歴史〉を求めていることが認められたが，他方，住民調査からは〈歴史〉と並んで自然環境が重視されていることが明らかになった。この傾向は居住地選択の動機に関する調査において特に顕著であった。つまり〈歴史〉は「内からのまなざし」よりは「外からのまなざし」との間に高い相関性を示していることが認められた。

鎌倉市による総合計画を検討すると，そこで描かれる〈歴史〉が「中世」や「鎌倉時代」へと一元化されていることが認められた。他方，観光計画における〈歴史〉は縄文，鎌倉，江戸，明治，大正，昭和などきわめて多様であることが明らかとなった。つまり観光政策において鎌倉は「多様な時代の史跡を各所に残す多様な魅力を持つ都市」と把握されていることがわかった。同様の傾向は観光協会によるインターネットサイトでも確認された。鎌倉市内には必ずしも「鎌倉時代」や「中世」と関連しない観光スポットが散在しており，来訪者の目をこのような場所にも向けさせるためと考えられる。

それに対し観光施設の入場者数データからは，多様な〈歴史〉を謳う自治体や観光協会の思惑とは裏腹に，来訪者のまなざしは「鎌倉時代」「中世」という〈歴史〉に向けられていることが明らかとなった。

これらの作業を通じて，鎌倉の〈歴史〉の内実は極めて多様かつ不確かで，それを定義するアクターや定義される状況によって異なっていること，および，〈歴史〉は多様で不確かでありながらも，観光資源や行政の政策対象としてきわめて重要な位置を占めており，同時に住民にとっては地域アイデンティティの根拠であること，以上二点が明らかになった。

3. 付　　記

本研究の成果は以下の学会にて報告された。

- 「〈歴史〉の空間的配置――『古都』鎌倉の寺社観光を事例として」Cultural Typhoon 2003 シンポジウム（於：早稲田大学）2003年6月29日（口頭発表）.
- 「近代鎌倉における『鎌倉らしさ』の構築――鎌倉の〈歴史〉とツーリストのまなざし」第76日本社会学会大会（於：中央大学）2003年10月12日（口頭発表）.

また，本研究をもとに学位請求論文の執筆を予定している。

【主要参考文献】

天野久弥，1997 [1984],『いざ鎌倉——御谷騒動回想記（第三版)』天野静枝.
鎌倉市市史編さん委員会，1994,『鎌倉市史——近代通史編』吉川弘文館.
加藤理，2002,『〈古都〉鎌倉案内——いかにして鎌倉は死都から古都になったか』洋泉社.
大仏次郎，1974 [1965],「破壊される自然」『大仏次郎随筆全集第二巻「石の言葉」「今日の雪」』朝日新聞社.
雑誌『鎌倉市民』鎌倉市民社，各号.

【統計資料および行政資料】

『鎌倉らしさに関する調査』株式会社野村総合研究所，1975.
『鎌倉のイメージに関する調査』鎌倉市企画調整部企画課，1984.
『魅力ある鎌倉の観光を目指して——提言』鎌倉市観光審議会，1993.
『鎌倉市観光客動態調査——調査報告書』鎌倉市市民部観光商工課，1994.
『鎌倉市観光基本計画策定調査——報告書』鎌倉市市民部観光商工課，1995.
『鎌倉市観光基本計画』鎌倉市市民活動部観光課，1996.
『鎌倉市都市マスタープラン——ダイジェスト版』鎌倉市都市部都市計画課，1998.
『平成 13 年観光有料施設利用者数及び観光無料施設利用者数推計表』，2001.

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程

近代日本における兵役拒否・兵役忌避・徴兵逃れ祈願

三 上 真 理 子*

1. はじめに CO が提起する問題

第一次世界大戦中，イギリスには約 16,000 人の良心的兵役拒否者 (CO＝conscientious objector) が存在した。CO たちの拒否の動機・手段・程度（さらには，彼らに対する軍および政府の対応）は一様ではなかったが，いずれの場合においても，彼らを兵役拒否 (CO＝conscientious objection) という行為に駆り立てたのは次のような信念であった。「徴兵制度はすべての良心の自由を否認することによって初めて維持されるものであり，したがってまたいかなる人に対しても自分の生命を差出す際に自由に判断を下す権利を認めなかったり，人殺しをおかすように強いたりすることは，国家の正当な権限の及ぶところではない」（ボウルトン pp. 293-294, 1919 年，NCF 全国委員会の決議文より).

CO (conscientious objection) の本来の意味は，「良心にもとづいて，例えば国家権力などからする強制的な服従要求を拒否すること」（日本友和会 p. 11）であり，種痘の拒否の場合にも使われたが，強制徴兵制が広く布かれるようになってからは，良心的兵役拒否を意味するようになった。CO (conscientious objector) たちは，徴兵制は国がその構成員である国民に“人を殺す”義務を強制的に課すことと捉え，個人の良心を無視してまでも服従を強制する国の権利を否定する。彼らは，個人の内面に対して国が干渉することを断固として拒絶し，国民に暴力行為を強制する国の権利を否定した。この意味で CO は近代国家における個人と国（権力）の緊張関係を鮮やかに描き出す。

明治維新以降，徴兵により支えられた軍隊は，国民統合の重要な手段として，また，海外への拡張の